




Panasonic NPOサポートファンド  
子ども分野 2011年助成事業 成果報告会



子どもが学び、子どもを学ぶ  
大人と子どもの地域拠点事業

特定非営利活動法人  
福井県子どもNPOセンター

# 背景と目的

- 子どもの成長のためには、子どもが遊ぶことのできる時間や空間、そして仲間という3つの「間(マ)」が欠かせないと言われている。しかし、大切なこのサンマは福井という地方にあっても年々失われている現実がある。
- ユニセフの調査では、孤独を感じる子どもの割合が世界1位、将来責任ある仕事に就きたくない子どもの割合が50%にもものぼると報告されている。運営しているチャイルドラインから見えてくるのも、自己肯定感の低い子どもたちの姿である。
- 福井県子どもNPOセンターでは、2010年4月より福井市の委託により、旧公民館を使って児童クラブの運営を始めた。この児童クラブを、地域の幅広い世代の子どもたちが遊びや直接体験を通して育ち合うことのできる拠点に、また地域の大人が子どもたちの育ちを考え合う拠点にしていきたいという思いがこの事業の背景である。



## 事業の目的は・・・

- 運営している児童クラブ(旧公民館)を地域に開き、そこを拠点に子どもたちが表現活動を通して仲間づくりをすることで、児童クラブ登録児童より上の学年の子ども達の居場所となる。
- 中学生が自己を見つめ、主体的に自分の人生をいきいきと生きることの大切さを考える機会をつくることで、10代の子どもたちの育ちを応援する場となる。
- 地域で子どもに向き合う大人を対象に、地域で求められる子どもの居場所の具体的なあり方を共有することで、地域で子どもを見守り子どもの成長に関わろうとする大人の輪を広げていく。

# 目標

- 地域におけるさまざまな団体と事業を協働することで、ともに子どもの育ちを考え合い、子ども観を共有するとともに、地域でのネットワークが構築される。
- 今まで登録した子どものみが利用できる施設であった児童クラブが、地域の子どもの多くが広く利用できる施設として位置づけられ、地域の児童の居場所となる。
- 事業にかかわった地域住民や学生が当センターの会員となり、組織の人的基盤、経済基盤が強化される。
- 表現活動を通しての仲間づくり、中学生のための講座が他地区のモデルとなり、当センターのプログラムとして波及していく。



# 事業① 小学生の表現教室

- 相手の気持ちに耳を傾け、その上で自分の気持ちを伝え表現することの大切さを、演劇的な手法を使って子ども達自身が気づいていく事業。
- 指導には表現活動の専門家があたった。後半、子どもたちが自らの発想で劇をつくり、それを公民館で発表した。
- この事業により、小学校中学年・高学年の子どもたちが児童クラブの施設を利用し、仲間づくりをすることができた。



## 事業② 中学生のための講座

- 中学生を対象に、自分自身と向き合い、自分が好きなこと、やりたいことを主体的に考える時間を持つ講座を開催した。
- また、中学1年生・2年生を対象に、学校の授業のなかで、自己肯定感を高め、自己有用感を育む講座を開催した。
- 中学1年生を対象とした講座は、専門家(エデュケーショナルキャリアカウンセラー)とともに独自のプログラムを開発し、週1時間の授業を連続3回、のべ24クラスに届けることができた。
- 1年後に再び中学校を訪問すること、児童クラブが職場体験の場になることが決まった。



## 事業③ 大人のための研修会

- 指定管理者として児童館や子育て支援施設の運営を担うなど、先駆的な取り組みで全国から注目をされているMiyagi子どもネットワークの運営責任者を福井県に招致し、講演会を開催した。
- この事業は、福井市社会福祉協議会、福井市児童クラブ連絡協議会の協力のもと、児童クラブ職員研修という位置づけで実施することができ、特に放課後の子どもの育ちを考える大人が、今必要とされている子どもの居場所のあり方、その基本となっている考え方や取り組みについて学ぶ機会となった。



# 成果と課題



- 小学生・中学生対象の事業を通して、会員のみの利用に限定されていた児童クラブの施設を一般の子どもにも開いていくことに、地域の理解と共感を得ることができた。
- 小学生の表現教室では、お芝居の発表会に向けて、地区運営委員や保護者の皆さんと話し合いを重ね、衣装や背景づくりを協力して行った結果、それらの方々が子どもNPOセンターの会員として登録し、人的基盤の厚みが増した。
- 中学生のための講座では、子どもたちに伝えたいことをスタッフ一同で真摯に形にしていくプロセスこそが子どもNPOセンターのプログラムであり、その思いを共有する人的財産がそのまま基盤であることに気づかされた。アシスタントとして手伝ってくれた学生から今後もぜひ手伝いたいという申し出があり、スタッフの年代層に広がりが出たことはとても大きかった。
- 講師とスタッフが共に開発し実践した「自己肯定感を高めるプログラム」は新たな事業として検討することになった。プログラムはまだ改良していかなければならない点が多い。スタッフがさらに研鑽を積み、より良いプログラムを社会に届けることを通して、さらなる基盤強化をめざしたい。
- 大人のための研修会では、児童クラブ職員だけでなく地域で子どもにかかわるボランティアの方など、さまざまな立場の方が講演会に足を運んで下さり、当センターへの信頼感が増した。
- 子どもの問題は当団体だけで解決できるものではない。学校現場やさまざまな子どもにかかわる団体といかにネットワークを組みともに歩んでいくことができるか、それが大きな課題であることに気づかされた一年であった。

# 今後の取り組み



- 木田児童クラブを地域に開き、地域の子どもたちの居場所づくりを進めるといふ目的は、地区の後押しのもと、事業を通して、まずは児童クラブ会員の利用が少ない週末(隔週)に達成することができた。これが契機となり、新しい公共の場づくりモデル事業に発展的な事業が採択され、次年度は、小学生の週末の利用がさらに進む予定である。
- 中学生にとっての居場所づくりはまだまだ難しい課題が残されているが、中学1年生を対象にした3回連続講座を経て、次年度は木田児童クラブが中学2年生の職場体験の場となることが決定した。また、1年後には中学2年生になっている子どもたちに「1年後の自分にあてた手紙」を届けることも決まっている。これらを生かし、木田児童クラブが中学生にとって気軽に立ち寄ることのできる場所になるよう、地域や学校に向けて、丁寧に働きかけていきたい。
- 地域の大人が子ども観を共有し、ともに子どもの成長を見守っていくために、地域との話し合いを重ね、地域の行事との連携を図っていきたい。
- 福井県子どもNPOセンターの事業全体を通して見えてくる今の子どもたちの姿を報告書にまとめ、広く福井県民に伝えていく取り組みをしていこうという声スタッフが上がっている。この実現に向けて動き始める予定である。